

いつかの

うた 詩のように

高 崎 藤 樹

(一)

やや猫背気味の芳太郎が、両の腕を肩からだらりと落とし、小股で、右足をわずかに引き摺りながら、里中をひよこひよここと歩いていく姿を見かけるようになると、それまで野良仕事に精を出していた里の衆たちは、急に落ち着きをなくし、里の彼処此処でひそひそ話しの輪ができるようになる。

里の子どもたちばかりは、親たちの不安気な顔を余所に、芳太郎の姿を見付けるといよいよ活気づいてくる。

「それ、お屋敷様の芳公馬鹿のお宝唄ぎが始まったぞい、」ひとりの子が囁したと、里の四方から、丸で砂糖菓子に集まってくる蟻の子のように、目を輝かした子どもたちが躍り出してくる。最初に囁したた子は片手に小さな棒切を持ち、芳太郎の四・五間うしろから怖る怖るついて歩く。後れて来た子等もやはりそれぞれが何処からか探し出してきた小枝や竹切を手にしながら、芳太郎のあとに従って歩く。

「おい、お宝唄ぎは、」ひとりの子が、先頭を歩く子の脇腹を小衝きながら小声で聞く。

「まだじゃ。」

「そうか、まだか。」尋ねた子の満足気な声に、あとをついてくる子どもたちもコクリと頷く。

芳太郎は、自分のあとをつき従ってくる子どもたちにはまったく頓着するふうでもなく、時折、道の左右をキョロキョロと見回しながら、ただひよこひよここと歩いて行く。

(二)

榎芳太郎、二十四歳、四面を山に囲まれたこの里の、北の高台にある大きな屋敷の長男である。母と祖母と、今は山向うに行儀見習いに出ている妹との四人暮らしである。

近郷で榎家といえは、誰ひとりとして知らぬ者がない程、代々続いた旧家で、この里の衆たちは今もお屋敷様と呼んで一目置いている。

父親の芳蔵がこの家の当主であった時分は、この里の半分以上の田畑を占める程の大地主で、毎日、御氣嫌伺いに訪ねてくる者が絶えることがない程だったのだが、芳太郎が満三歳の誕生日を迎えてすぐの頃、県の土木事業にも携わっていた芳蔵が、他郷で不慮の事故

死に偶って以来、さしもの名代の旧家も急速に衰えてしまった。

今では、当時の十分の一にも満たない、それでも三町歩あまりの田地を人に貸し、その小作料で暮らしている。家族四人が暮らしているには、十分過ぎる程の身入りだが、わずか二十年あまりで資産を十分の一に減らした程だから、この先どうなっていくものやら、大方の察しはつくだろう。

(三)

芳太郎の名付親は、この里の東の高台にある瑞雲寺の凡愚和尚である。ひとりでも多くの子宝に恵まれ、この里と榎家をさらに繁栄させたいと願った芳蔵が、和尚に頼んで名付けてもらった芳太郎という名前だが、芳蔵があまりにもあっさり死んでしまったため、榎家の繁栄は芳太郎の成長を待たなければならなくなった。

ところが、悪いことは重なるというのか、芳蔵が逝って半年程たった夏の夜、今度は芳太郎が、原因不明の高熱に犯され、榎家を七日七夜の大恐慌に陥れたのである。悪質な知恵熱が昇じたものか、それとも脳膜炎だった

のか、或いは恙虫がとりついたのか。兎に角、八日目の夜明け方には熱も引き、どうにか一命はとり止めた。母フサの水垢離が利いたものか、祖母トキの日毎の般若心経二十一巻誦經が利いたものか、或いは凡愚和尚の不動堂での護摩供が利いたものか、それとも癒える時期が訪れていたのか、そのへんの経過は作者もあまりよくは知らない。兎に角、山向うの医者ぢやうの腑甲斐無さだけは里中の評判になった。

芳太郎は元気になった。ただ、高熱がもとで、顔にしまりがなくなり、頭の働きも少々鈍だんになってしまった。

以来、芳太郎という呼び名は、榎家の者たちと名付親である凡愚和尚だけにしか使われなくなった。里の衆たちは、彼のことを芳公馬鹿と呼んでいる。勿論、榎家の者の前で堂々と芳公馬鹿と言つてのける程の猛者は未だいない。お屋敷様の威光は、まだまだ此の里では強いのである。

(四)

芳太郎には奇妙な癖がある。

里中を彼処此処とあてどもなくうろつき回

り、途中、何か気に入ったものがあると、そこがたとえ里の大通りの真中まなちであれ、里の衆の屋敷内であれ、家の中であれ、まったくお構いなしに、不意にしゃがみこみ、その気に入ったものにじっと見入るのである。それは時には、木切れであり、小石であり、或は、塵芥ちんがいの類である。又、時には人の家の柱であり、路傍のお地藏さんでもある。しばらく見入った後、今度はそれを手に取り、目の先まで持ち上げて再びつくづく見詰めはじめ。それが終わると、今度は、それを捻ねってみたり、手をこすりつけてみたり、或いは鼻に近付けてそれを嗅いでみたり、手を嗅いでみたりするのである。ひと通りの動作が終わるまでに小一時間は優にかかると。嬉々として戯れている芳太郎の姿に圧倒されてか、或いは山里ならではの寛大さの故か、里の衆はたとえ仕事の邪魔になることがあっても、誰ひとりとして芳太郎の作業を途中で止めるようなことはしない。

ひと通りの動作が終わると、芳太郎はやおら立ち上がり、それまで関心を示していたものに一顧も与えることなく、丸で何事もなかったかのように、ただ、少々間延のした顔を前に突き出して、再びひょこひょこ小股で歩

き去っていくのである。

いつ、誰言うとなく、芳太郎の奇癖をして「芳公馬鹿のお宝喫ぎ」と呼ぶようになった。

(五)

芳太郎のお宝喫ぎが始まったのは、彼が十七歳になった頃からだから、かれこれ七年あまり続いたことになる。芳太郎が、お宝喫ぎで里の衆の家に足を踏み入れたとしても、別に何ひとつとしてその家からなくなるような騒ぎが起こるわけではなかった。里の衆たちも芳太郎のなすがままにまかせていた。

里の衆が顔をしかめることをひとつ挙げるなら、それは、自分の子どもたちが、お宝喫ぎの真似をして、芳太郎の後をぞろぞろと蟻の行列のように歩いて歩くことだった。だが、芳太郎の頭の鈍さ加減が、子どもに移ったという話しが持ち上がったわけでもない。そのことを理由に子どもを叱りつけるような親はひとりもいなかった。

里の衆たちが、里中で芳太郎の姿を見かけると、急に落ち着かなくなり、彼処此処でひそひそ話しを始めるようになったのは、ここ半年程前からのことである。

それに遡ること一年、都合一年半程前に、芳太郎のお宝喫ぎという奇癖に、もうひとつ、不可思議な才能が加味された。里の衆たちのひそひそ話しの原因はそこにある。

(六)

涼風にはの三日月の或る初秋の夜半、昼間の野良仕事の疲れでぐっすりと寝入っていた里の衆たちは、遠い闇の向こうから、じゃあん、じゃあんと鳴り響く半鐘の音に、突然眠りを破られた。

「どこじゃア、」裸足のまま、あわてて南の門まで駆けつけた祖母のトキは、既にそこに立って火の手を探しているフサに声をかけた。

「南じゃ、」

「南のどこじゃア、」

「そこまではようわからん。」

見れば、里の南の空がうっすらと黄ばんでいる。

「あれじゃアわからん、」トキの声が終るか終らないかの時だった。南の空の黄ばみがフツト消えた。と、一瞬の後には空はパッと朱色に染まり、黒い巨木の影が夜目にも鮮かにふたりの目をとらえた。

「カカさん、」

「正蔵がたじゃア、」ふたりはあわてて母家の方に駆け戻っていった。

ふたりが、南の正蔵の家に駆けつけた時、

大かたの調度品は既に外に運び出されていたが、母家の方は勢いに乗った炎に包まれ、今にも倒れかかる寸前だった。

「土蔵は」

「まだいい」

「消防はア」

「土蔵じゃア。」

「おおそうじゃア、わしらも行かねば、」

里の男衆たちは、猛り狂った炎の前で、大声を張り上げながら、彼処此処と駆けずり回っている。

「母家が落ちるぞい」呼び声が終らぬ先に母家は轟音をたてて崩れ落ちた。

「今じゃ、水じゃア」

「水じゃア」

里の衆たちは、てんでに持った手桶の水を倒れた母家に向かって一斉に掛ける、……。

(七)

火の手がおさまったのは、東の空がようやく

く白みかけた頃だった。

火事は、母屋を全焼させ、納屋を半焼させ、納屋の向こうに建てられていた土蔵を水びたしにしてどうにか収拾がついた。

眉を焦し、水と汗とススで全身をどろどろにし、疲れ果てた顔をして、里の衆たちがそれぞれの家に引き上げ始めた頃、トキとフサは正蔵の姿を探し始めた。火事騒ぎがおさまり、その家がか立ち直るまでの間、焼け出された家族の面影は榎家が見るようになっていた。

「正蔵はアどこじゃ、」

「土蔵の前ですじゃあ、」トキの声に、里の衆のひとりが答えた。

所々黒い炭の塊りとなって、未だ白い湯気を出している母屋の跡を横目に、トキとフサが土蔵の方に向かっていくこうとしていた時、ふたりは、半焼した納屋の傍の草むらに、そこだけが場ちがいのようにそびえ立っている樺の巨木の根元に、じっと坐り込んでいる人影を認めて、思わず立ちすくんだ。

「芳、」

「芳太郎。」

眉と髪を焦がし、ね巻のまままで水びたしになった芳太郎が、草むらの中にへたりこみ、普

段以上に惚けた顔で、母屋の焼け跡を眺めていたのである。

「カカさん」

「おう、後の段取りはわしがするで、芳太郎をば連れて帰れ。それと、東の離れを開けて、朝食あさめしを用意せろ、」そう言い離つとトキは土蔵に向かつていった。

正蔵の家族は皆無事だった。

その日の昼前には、里の衆たちの車力に積まれた調度品が、榎家の東の離れ家に総て運びこまれた。

その日の昼過ぎから、見舞いの衆が次々と東の離れを訪れてきたが、正蔵の女房のキヌは寢床についてたまま起き上がれず、正蔵もまた、生返事すらできぬ程に惚けていたので、トキが里の衆を指図して、見舞いは、二、三日後に改めて行くこうということになった。

(六)

火事騒ぎの疲れと気落ちのために、正蔵の女房のキヌは三日の間寝込んでいたが、四日目にはどうにか落ち着きを取り戻し、離れの家から、母屋のトキやフサのところまで挨拶に来れるようになった。

火事跡の草むらから、正蔵一家よりひと足早く、榎家に連れ戻されていた芳太郎は、キヌと同様にやはり三日の間寢床に就いていた。

ただ、キヌは三度の食事時には寢床に起き上がり、わずかだが食べものもノドを通していたのだが、芳太郎の方は食事をするどころか、三日の間まったくの熟睡の状態で、トキやフサがどれだけ大声を掛け、身体を揺振っても目を覚ますことはなかった。これまでも一日中寢床の中で眠り続けたことが何度かあったが、三日間続けてということはなかった。

ただ、これまでと同様に、あまりにも安らかな寢息をたてて眠っていたということや、生まれて初めて、しかもあれ程目近に大火事を経験したのだから、ショックも大きかったに違いないし、普段以上に疲れが出たのだから、それに、尋常の人よりも頭の働きの鈍さから、こういうこともあるのだろうということ、トキやフサも然程大きな心配はしていなかった。

トキやフサの思惑の通り、丸三日間眠り続けた芳太郎も、四日目の昼前には寢床から起き上がり、平生とまったく変わらない様子で、昼食時には自分から進んで食膳の前に坐っていた。トキとフサは芳太郎の顔を見ても、

互いに頷き合っただけで、後はいつものように黙然と食事を済ませ、それぞれの持ち場に戻っていった。

(九)

それからひと月の間、里の衆たちは、芳太郎のお宝嗅ぎを見かけることはなかった。里の衆たちは秋の取入れに忙しく、南の正蔵の家の大火のことが話題に持ち上がることもなくなっていた。正蔵一家は、既に榎家の東の離れを出て、自分の家の土蔵を当座の仮住まいとし、納屋の方の修復を通いの大工に急がせ、自分たちは里の衆たちに手伝ってもらいながら取入れの方に精を出していた。

正蔵の家は、榎家と並ぶ程の土地持ちで、女房のキヌが里一番の客坊と噂される程だったので、誰も正蔵一家の暮らしむきを心配することはなかった。

そんな或る日、自分の家の取入れ仕事に駆り出され、少々飽きのきていた里の子のひとり、芳太郎のお宝嗅ぎを発見した。

「やあ、お屋敷様の芳公馬鹿じゃ、お宝嗅ぎじゃア」

「どてじゃア」

「こつちじゃ」

「東じゃア」

里の子どもたちは皆色めきたった。取入れの手伝いにいささかうんざりしていたところに、まさに待望の、換言すれば、遊びの中でも真打ちが登場してきたのである。皆てんでに棒切や竹切を拾い持ち、或る者は刈田の中を、又或る者は畦道を、又或る者は馬車道を、東の山裾の瑞雲寺への本道を、いつものようにひよこひよここと歩いていく芳太郎を追って走った。

末だ誰も芳太郎の後をついて歩いていない者がないだけに、子どもたちの先陣争いは熾烈である。或る者は勢いあまって田中の小さな水路にはまり、或る者は小石に躓いてしたたかに膝小僧を擦り剥き、又或る子は、兄に置いてけ堀を食わされたと泣きわめく。

芳太郎は、そんな子どもたちの姿には一瞥すらくねらず、時折、道の左右をキョロキョロと見回しながら、ひよこひよここと歩いていく。

(十)

瑞雲寺の長い階段にさしかかる少し手前から、右手に小さな下り道が、里の南に向かっ

て伸びている。芳太郎はその小道に入っていた。子どもたちはそこでようやく芳太郎に追いついた。

芳太郎は未だお宝嗅ぎはやってはいない。子どもたちは息を切らしながらも、互いに満足そうに頷き合い、芳太郎の後に従った。

途中、小道が右に大きくカーブするあたりから道幅が少し広くなり、そこから一町程行ったところの道の右下に小屋が建っている。延べ五坪程の小屋だが、人が住んでいるわけではなく、板戸もところどころ剥がされ、近所の里の衆に藁小屋代わりに使われている。瑞雲寺の持ち家だが、荒れるにまかせてあり、里の若い衆たちが、時折逢引き宿として利用している。

芳太郎はそこで立ち止まった。

今か今かという思いにわくわくとしながら、しかも、芳太郎の後を怖る怖る付き従っていた子どもたちは、芳太郎が突然立ち止まったのであわてて身構えた。

芳太郎はそこに佇んだまま、道下の小屋の屋根をじっと見降している。

子どもたちは息をのんで見守っている。と、不意にしゃがみこんだ。

「す、するぞい、」誰かが小声で言う。

子どもたちは領き合い、目を大きく見開く。芳太郎が足元の小石を手に取った。が、……。

すく、と立ち上がると、芳太郎は手に取ったその小石を道下の小屋に向かって投げつけた、しかも、けたたましい声で、「火事だァ、火事だァ」と叫びながら。

足元の小石を拾っては、「火事だァ、」と投げ、また拾っては、「火事だァ、」……。

子どもたちは啞然としていた。かつて聞いたこともない芳太郎の大声だった、かつて見たこともない芳太郎の激しい姿だった。

しばらく続けていた石投げをはたりと止めると、芳太郎は子どもたちの方にくると向き直り、そのままひよこひよここと近づいてきた。子どもたちは、驚き、後退り、道の左右に分かれて、近づいてくる芳太郎に道を開けた。少々間延した顔をにこにこしながら、芳太郎はいつものように子どもたちをまったく無視して、やや猫背気味に、両の腕をだらりと落とし、小股で、右の足をわずかに引き摺りながら、瑞雲寺の方に向かって去っていった。

子どもたちは呆然として、芳太郎の姿が見えなくなるまで見送っていた。

「お宝喫きはせんじやったぞい。」誰かが呟き、「おお、せんじやった、」皆がそれに応じた。声にして出した時、突然恐怖感が甦ってきたのか、わっと声を上げると、瑞雲寺の方には向かわず、道をそのまま南に向かって駆け下っていた。

(五)

次の日の夜半、屋間の取入れ仕事に疲れ果て、ぐっすりと寝入っていた里の衆は、再び、遠い闇の向こうから、じゃあん、じゃあんと鳴り響いてきた半鐘の音に、たたき起された。

「どこじやア、」
「東じゃ、山下じやア、」里の衆たちはあわてふためいて、或は手桶を両の手に、或は長い手鉤を掴み、或は寝巻きに裸足のまま、東の瑞雲寺に向かって走った。

火が出たのは、前の日、芳太郎が小石を投げつけた、あの瑞雲寺の持ち小屋だった。里の衆が駆けつけた時には、小屋は炎の中だった。

里の衆たちは小屋の火を消すことよりも、火の粉が飛んで、山に燃え移らないようにと氣

を配った。小屋の周りの小さな木立や、枯木等はきれいに切り払われ、水が掛けられ、手桶いっぱいに入れられた水を、いつでも掛けられる態勢で、里の衆たちは、或は炎の小屋を取り巻き、或は山を見守り、或は一心に小屋から出る火の粉を追い続け、指図し、小屋が早く燃え尽きることを祈った。

里の衆の祈りが通じたのか、小屋は意外に早く燃え落ち、周りの草むらと、少しばかりの立ち木を焦がしただけで消し止められた。念には念ということで、黒い炭の塊りの上には、これでもか、これでもかという具合に、手桶の水が降り注がれ、自衛消防団の当番の者が五人程、夜の明けるのを待つことになった。里の衆はそれぞれの家に引き上げた。
翌日、疲れを残し、目をしわしわさせながら、それでも取入れの仕度にかかっている親たちに向かって、「芳公じや、芳公馬鹿が火事を言い当てよったんじやア、」といくら叫んでも、親たちはまったく取り合わなかった。
瑞雲寺の凡愚和尚も、持ち家とはいえ、少々処分に窮していた小屋が片付いてくれたので、却って清々していた。

(四)

里の衆たちが、子どもたちの訴えていたことが、満更つくり話でもないということに気がつくようになったのは、それから半月程後のことだった。

南の正蔵の家の二軒隣りの弥助の家の前で、芳太郎が、例の大声を上げて、納屋に向かって小石を投げるのを、直ぐ真近で、啞然として見守っていた者が数人いたのである。

しかも、火事はその日のうちに起った。昼過ぎに、納屋の前で焼かれていた炊殿もちがらの火が、夕方、納屋の横手に積まれていた藁束わらに燃え移ったのだった。

幸い、未だ田中に残っていた者も多く、また、弥助の女房が夕食の仕度に帰っていて、発見が早かったので、納屋の壁板を少しばかり焦がした程度の小火ほやで納まった。

里の衆たちは色めきたった。ふた月足らずのうちに、火事騒ぎが三件も続いて起ったのだから無理もない。

芳太郎の例の石投げを目前に見ていた里の衆のひとり、「お屋敷様の芳公馬鹿が臭せ」と駆ぎ出したが、その日の昼過ぎから、榎家

に、先々代、つまり芳太郎の亡き祖父の三三回忌の法事の相談で呼ばれていた瑞雲寺の凡愚和尚が、芳太郎も含めた榎家の者たちと一緒に夕食を食べていたことがわかるや、たどころに芳太郎の疑いは晴れた。

しかし、その日のうちに、芳太郎の奇癖と不可思議な力は里中に知れわたってしまった。子どもたちは、親たちが、やっと自分たちの言葉を信じてくれたことで、いささか鼻高々だった。

(五)

弥助の家の納屋を最後に、その年の火事騒ぎはなかった。

芳太郎のお宝嗅ぎが再開され、里の子どもたちの心を、期待と怖れでいっぱいにしてながら、活気づけたのは、山里の雪が解け始めた初春の頃からだった。

里の衆たちも、芳太郎のお宝嗅ぎを目にするようになって、初めの頃は、あの火事騒ぎを思い出し、気味悪がっていたものだが、別に里の衆たちが不安がるようなこともなく、春が過ぎ、夏が過ぎていった。

芳太郎のお宝嗅ぎは、それまでも度々行わ

れていたが、里の衆の頭からは、一年前の火事騒ぎはまったく消えてしまっていた。

正蔵の家も、前よりも構えの大きな母家が建ち、里は穏かなまま、再び取入れのシーズンに入っていた。

子どもたちも、芳太郎のお宝嗅ぎだけで十分に満足していた。

そんな或る日の昼下り、里の西、榎家の遠縁に当たる繁次の家の前で、芳太郎の叫び声が始まった。

「火事だア、火事だア、」

石は土蔵に向かって投げられていた。

「火事だア、火事だア。」

芳太郎の後に従い、お宝嗅ぎがいつ始まるかと、胸を躍おどろしていた子どもたちは、突然の石投げ騒ぎに度肝を抜かれてしまった。

「大事じゃ、大事じゃア、」ひとりの声に、われに返った子どもたちは、掴んでいた棒切ぼうぎりや竹切たけぎりを放り投げると、わっと一声上げるや、

てんでに散らばり、田中の取入れに精を出しているそれぞれの親たちの元へと走った。

「大事じゃア、芳公馬鹿が投げよつたア、」

「大事じゃア、芳公馬鹿の火事触れじゃア、」

取入れに余念がなかった里の衆たちも、この時ばかりは大あわてにあわてた。

繁次は、取るものも取り敢えず、家に飛び帰っていった。

芳太郎の姿は、既にどこにも見当たらなかった。繁次は土蔵の前にそびえ立つ、樫の根元で途方に暮れていた。どこにも火の気はなかった。火の手が上がっているわけでもないの、何をどうすればいいのか、まったく見当をつけかねていた。

ひとり、ふたりと、里の衆が繁次の家に集って来た。思案に倦きんでいる繁次に向かって、「取り敢えず、予防をするぞい。」

「どうするじゃア、」

「桶に水を張るぞい、用心に番を置くぞい、」
「それじゃア、それがいい、大桶をみつつ、よつつ用意するじゃア。」

相談はまとまった。彼処此処から集ってきた里の衆たちは、それぞれに手分されて、繁次の土蔵の四方に、大人ふたりが手を回しても届かぬ程の大桶を運んできた。里の家々には、それぞれ防火用の大桶が用意されていたのである。

大桶には水がいっぱいにはられ、里の自衛消防団の当番の者ひとりと、繁次が夜の見張りに立つことになり、里の衆たちは家に戻っていった。

その夜は何事もなく、夜明け方から雨が落ち始めた。明けると、雨は大粒になり、大桶のへりを伝って雨水が流れ落ちるようになっていた。雨はその日一日降り続き、田中での取入れ仕事もできぬ里の衆が、ぼつりぼつりと繁次の家を訪れては、帰っていった。

「こんだけの雨じゃ、火の手の上がりようもねえぞい、」繁次の家に集っていた四、五人の里の衆たちが、安心して、話しに花を咲かせようとした時だった。

突然、閃光が走ったと思つた瞬間、轟音とともに、バリバリと柱が引き裂かれる音が表から響きわたった。

「なんじゃア、」里の衆たちは肝をつぶした。「か、神鳴りじゃア、」大声を上げるや、繁次は飛び出した。

土蔵の前の樫が見事に裂かれ、土蔵の屋根に落ち掛っていた。土蔵の入口のところに置かれていた大桶は、無残にもあとかたもなくつぶされてしまっていた。樫の裂目は黒く焦げ、土蔵の入口の前の柱は、一本が傾き、残りの一本から火の手が上がっていた。

「火、火じゃア、」繁次は土蔵の横手に据えられた大桶に向かった。里の衆たちも外に飛び出し、繁次の後に従つ

た。

火の手はすぐに消えた。土蔵の屋根棟がつぶされ、土蔵の入口の柱が焦げついて傾き、入口の屋根瓦が壊れ落ちただけで、騒ぎの結着はついた。

(四)

芳太郎の石投げ騒ぎは、今度も見事に火事を言い当てた。

里の衆たちは、芳太郎のこの不可思議な予兆の前になす術もなく敗れ、いよいよ気味悪がり、怖おそじ恐れだした。

その年は、この繁次の家の一件だけで火事騒動は終つた。芳太郎のお宝喫ぎは、以後もしばしば続いたが、子どもたちを喜ばせ、里の衆たちを、不安に戦たたかかせただけで、年は暮れ、年は明けた。

冬の間、芳太郎のお宝喫ぎはない。

そして、この春、お宝喫ぎが再開されるや、里の子どもたちは、冬の間うつつに鬱積した気持を一時に爆發させるかのように、芳太郎の後を嬉々として追いかけた。

里の衆たちは、芳太郎の姿を見かけるや、農作業に精を出すことも忘れ、気もそぞろに、

彼処此処の道中や、田中、畑中、里中で、ひそひそと話し、の輪をつくるようになった。

「お屋敷様の芳公馬鹿は、火事触れをして、火を招くごある。」

「芳公馬鹿は火を呼ぶじゃア、」

「これじゃア、むしろも仕事に身が入らん、」
「芳公馬鹿の火事触れはア、火を呼ぶじゃア」
里中をさまざまな流言蜚語が飛び交うようになった。

里は既に種時時に入っていた。

或る夜、里の衆は、南の正蔵の家で寄せ合を開いた。

正蔵と、自衛消防団の当番長と、繁次が代表になり、瑞雲寺の凡愚和尚のところに相談を打ちに行くということになった。瑞雲寺を訪ねる日は、正蔵たちの都合に合わせて、三日後の種時きが終った日の夜ということになった。

里の衆たちの流言や、不安な様子は、既に凡愚和尚の耳にも入っており、榎家のトキやフサもうすうすは気付いていたが、知っているぞというような顔もできず、知らぬ顔の半兵衛を決めこむ以外に術はなかった。

正蔵たちが瑞雲寺を訪ねることになった一日の、一日前の夜、凡愚和尚は、里の衆に

け取られぬ頃を見計らい、榎家への道を急いだ。

和尚の突然の訪れに、トキやフサも、里の衆たちの事態が遂に来るところまで来てしまつたということを感じた。

「なるごとくなってしもおた、」トキは呟いた。
「おおそおじゃ、わしも力を尽してみるのが、道を迷いだした者は、なんぼオ言うても耳に入りよらん。芳太郎は里を大火から守つてくよつたんじゃが、わかりよらんじゃろオ、」
和尚の声に張りはなかった。が、トキやフサには和尚の心がよく察せられた。

「カカさん、」

「おお、門から外に出さんごとするんじゃア、芳太郎も、あれらに馬鹿にされることもなかるう。」

「恩義も忘れよつて、」

「否ア、あれらはア、あれらで恩を知りよるで、お住持さんげにすがるとしよるんじゃ。」

「それで、芳太郎の方はどうじゃ、」

「そりやア、お住持さんもよう知つとるじゃろオ、」

「そおじゃのオ、あれは婆さの言うことだけは、よお聞きよるで。」

(五)

翌晩、正蔵たちが顔をこわばらせながら、庫裏の凡愚和尚の前に坐つた時、和尚はポツリと言葉を曳らした。

「婆さは、門を閉めるそおじゃ、」

「へえ、」正蔵たちは、一瞬、気が抜けてしまつた。

和尚のひと言で全てを理解した。彼らの表情には安堵の色が浮かんでいた。

「じゃがのオ、今度、もし火事が起つたら、小火では済まんかもしれんぞい」和尚はひと言釘をさした。

正蔵たちは膝を正し、表情を固くした。和尚は彼らの目の奥に、なんとも言いようのない怯えの色が走つたのを読みとっていた。

「お屋敷様にはア、なんち言うたら……。」

「なんも言わんでいいじゃろお、婆さらは里が一番大事じゃと思おてござアで。」

話はそれで終わった。
正蔵たちはひと安堵しながらも、なんとも言い表わしようのない思いを抱いて、瑞雲寺の暗く、長い階段を降りていった。

(丙)

夏が過ぎ、秋の彼岸が訪れた。

芳太郎は、榎家の広々とした庭の中を、ひよこひよここと歩き回っては、ひとり嬉々としてお宝唄ぎを繰り返している。

里中が榎家の庭になり、見物衆が里の衆や子どもたちから、榎家のトキとフサ、そして時折訪ねてくる凡愚和尚になったという程で、芳太郎にとって、そんなことはどうでもよいことだった。

相も変わらず、木切を捻ってみたり、小石を嗅いだり、納屋の柱に手を擦りつけては、その手を嗅いでみたり、ひとり戯れていた。

(由)

そして、今日。

瑞雲寺の本堂で彼岸会の大護摩が焚かれる日だということで、里の衆たちは昼前から挙って瑞雲寺に集まっていた。

榎家のトキとフサも、芳太郎の昼食の仕度に早目に掛り、今は芳太郎の寝屋となっている東の離れにそこそこに用意するや、殊数を片

手に瑞雲寺への道を急いだ。

ふたりがあわてて出かけた後、榎家の門は開かれたままになっていた。

庭中をひよこひよここと歩き回っていた芳太郎が偶々そこを通りかかった。

が、芳太郎は開かれた門にはまったく頓着するふうでもなく、そのまま、ひよこひよこことした足どりで、昼食の仕度が調えられている東の離れの方へ歩いて行つた。

しばらくして、突然、大きな叫び声が上がった。

「火事だア、火事だア、」

叫び声は何度も繰り返されていた。

だが、それを耳にした者はひとりとしていなかった。

(丙)

榎家の東の離れから火の手が上がったのが、その日のうちのことだったのか、それとも、翌日のことだったのか、それは作者も知らない。

(たかさき ふじき)

昭和五十四年三月 本学国文学科卒業)

